

渋沢敬三にかかわる研究ネットワーク（渋沢敬三を顕影）

著者	飯田 卓
図書名	魅せる!超フォークロア : 近藤雅樹ワールドの探検 . 大国正美, 水口千里編.
開始ページ	21
終了ページ	26
出版年月日	2014-12-03
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008508

洪沢敬三にかかわる研究ネットワーク

飯田 卓

洪沢敬三の名は、一般にそれほど知られてはいない。柳田國男や折口信夫、宮本常一といった民俗学者と較べてみればよい。しかし、宮本常一を長年にわたって支援しつづけ、結果的に世に送り出したのは、ほかならぬ洪沢だった。また、洪沢は、柳田とともに雑誌『民族』を創刊した岡正雄の同級生でもある。洪沢は、岡が柳田と仲たがいでから岡を支援し、岡とともに日本民族学会（現在の日本文化人類学会）草創期の中心的役割をたした。つまり洪沢は、日本の民俗学・民族学・文化人類学の父とでもいえるべき立場にいる。

洪沢自身も、それらの分野で少なからぬ業績を残したが、たんに研究者として学界に関わっただけではない。実業を本職として、学問を経済的にも庇護しながら、関心のある分野を発展させた。

洪沢敬三は、日本資本主義の父と呼ばれる洪沢栄一の孫として生まれた。学生時代に生物学を志し、集めた標本を自宅の一角に展示して「アチック・ミュージアム（屋根裏の博物館）」と名づけ、その後の玩具・民具の収集運動に先鞭をつけた。しかし、東京帝国大学を卒業してからは、祖父に乞われて実業界入りし、上述したような「二足のわらじ」あるいは「側面支援」のようなかたちで民俗学・民族学・文化人類学に関わった。

本書で記念される近藤雅樹が物故したのは、洪沢敬三が物故した年（一九六四年）から数えてちょうど五〇年目（二〇一四年）にあたる。近藤は、職場である国立民族学博物館のウェブサイトに、当時の研究課題を「洪沢敬三研究」と記している。洪沢の人物像を愛した彼は、没後五〇年の節目で関係諸機関がさまざまな行事を開催するのにさいして、洪沢に関係する特別展「洪沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」（以下、ア

チック展)を民博で開くことにした(国立民族学博物館二〇一三)。その準備のために、気づかれないよう無理をしていたようだ。アチック展の開幕を一カ月半後に控えて、近藤は亡くなった。

1 渋沢敬三の映画撮影

近藤は、アチック展の内容を構想するにあたって、渋沢の足跡をたどる作業を重視していたようだ。その一部には、筆者も同行させてもらった。二〇一一年十一月二十八日と二十九日には、一九三七年に渋沢が仲間たちと船を借りきって行った瀬戸内海旅行をたどるべく、塩飽本島を訪れた。また、二〇一二年三月三日には、病気療養のため渋沢が長期滞在していた伊豆の松濤館を、また翌四日には、渋沢が名古屋の定宿にしていた安田屋を訪ねた。

アフリカ研究を専門とする筆者がこうした調査行に誘ってもらえたのは、映画などの非文書資料から人類学史をたどろうとしていた縁による。戦後の一時期、文化人類学者が大挙して高等教育に進出し、関連する読みものが普及した。文化人類学ブームと呼んでも過言でない。その背景としては、アメリカによる占領統治に文化人類学的知見が重視されたことが見落とせない(中生二〇〇六)。そしてもうひとつ、海外渡航が不自由ななか、海外で撮影された記録映画が好評を博し、文化人類学的調査と映画製作が歩みをともしながら発展してきたということがある(飯田二〇〇七)。人類学史と世相研究・映画研究のはざまにあったこうした事実を、あらためて重視したのが拙論の視点だった。

この拙論であつかったのは、昭和三十年代という短い時期だけだった。しかし、人類学と映画の関係は、もつと以前にまでさかのぼる。映画を発明したりユミエール兄弟が日本にまでカメラマンを派遣し、エキゾチックな文化風俗を撮影したことはよく知られているし、映画撮影をともなったケンブリッジ大学のトレス海峡調査(一

八九八（一九九年）を近代人類学の幕開けと位置づける見解もある〔Grimshaw 二〇〇一〕。そして日本では、渋沢敬三らアチック・ミューゼアムの同人（以下、アチック同人）が、映画と人類学との境界領域を先駆的に開拓した〔木村二〇一四〕。

アチック・ミューゼアムが活動を始めた一九二〇年代は、ヨーロッパ列強による植民地統治が確立し、第一次世界大戦を経て、列強の市民が植民地の風俗に目を向けるようになった時期にあたる。こうしたなかで人類学者による民族誌は、博物館や博覧会での展示とともに、主としてヨーロッパの市民社会に大きな刺激を与えた。映画もこれに影響を受けた。民族誌映画の先がけとされる「極北のナヌーク」が制作されたのも、近代人類学を代表する二つの著作〔マリノフスキー 一九六七、Radcliffe-Brown 一九六四〕の初版が出版されたのも、ともに一九二二年だった〔村尾ほか編二〇一四〕。このとき渋沢は、第一銀行の社員としてイギリスに滞在しており、さかんに各地の博物館を訪れていた。「文化人類学による啓蒙」とでも呼ぶべきこうした潮流に、渋沢もいやおうなく影響を受けたと考えてよい。

イギリスから帰った渋沢は、間髪を入れずに、アチック・ミューゼアムの活動を本格的に再開させた。イギリスから帰ったのが一九二五年七月、アチック・ミューゼアムの活動を再開させて活動内容を「チームワークとしての玩具研究」に絞りこんだのが同年十二月である。帰国に先駆けて、渋沢は、イギリスで十六ミリフィルムのカメラと映写機材を一式買いこんでいたという。この意味で、渋沢による映画撮影は、アチック・ミューゼアムの再開と軌を一にしていたといつてよい。ただし、じつさいに渋沢やアチック同人の宮本馨太郎がさかんに映画を撮影するようになるのは、一九三〇年代に入ってからである。

渋沢とアチック同人による映画（以下、アチックフィルム）の内容は、多岐にわたる。アチックフィルムを長年にわたって整理してきた原田健一によると、その内容は、渋沢家の記録、渋沢倉庫の記録、映像表現の追究、（民

俗事象の)記録・再構成、旅行映画、総合調査記録などに分類されるという(原田氏よりの私信)。このうち、アチック・ミュージアムの活動と関わりが深い民俗事象の記録・再構成や総合調査記録は、一九三〇年から三七年にかけて集中的に撮影された。

こうした事実にもとづいて、人類学と映画との関係に関心を抱いた筆者もまた、洪沢敬三研究にひき込まれた。そして僭越なことに、近藤と職場を同じくする縁から、近藤によるアチック展の一端を担うまでにいたった。

2 神奈川大学の写真・映画資料と民博の標本資料

洪沢らが残した映画資料は、神奈川大学日本常民文化研究所や、洪沢記念財団洪沢史料館、宮本記念財団などに引き継がれている。このうち神奈川大学日本常民文化研究所は、アチック同人らが集めた各種文書(主として漁民生活史料)や、洪沢が関わって運営した日本民族学振興会の資料なども継承している。このことから、神奈川大学は二〇〇九年に国際常民文化研究機構を設立し、引き継がれた資料を学内外の研究者が整理・活用しながら研究を進める体制を整えた。

近藤は、この機構の運営に、運営委員として関わった。そもそも、洪沢が残した資料を引き継いだのは、神奈川大学だけではない。前述の洪沢史料館や宮本記念財団のほか、近藤が所属した民博も、アチック同人が集めた玩具・民具などの標本資料を引き継いでいる。複製ができない立体の資料を一手に引き継いだ機関として、民博は、ユニークな立場にあるとあってよい。そうした機関からの代表として、近藤は、洪沢が残した資料の活用を推進する立場にあった。

近藤は、国際常民文化研究機構の運営委員としてだけでなく、民博館員としても、資料活用のためのはたらきかけを行った。その例としては、前述したアチック展のほかに、二〇一〇年度に行われた「アチック・ミュージ

アム関連資料の情報統合化にむけての調査研究」(文化資源計画事業)がある。これは、民博がすでにウェブサイトを通じて公開している標本資料データベースの資料と、国際常民文化研究機構が公開しているデータベースの写真や映画などを比較し、関連の深いものを相互に参照できるようにしようという目的をもっていった。

この目的のために、関連四機関が集まって話し合いを行った。二〇一〇年十二月に民博で最初の集まりをもち、二回目を二〇一一年三月十二日に行う予定だったが、東日本大震災が発生したため、同年六月に延期して神奈川大学で開催した。民博からは近藤のほか、国際常民文化研究機構の共同研究に参加する太田心平と筆者が同席した。また、同じく国際常民文化研究機構の共同研究に参加する笹原亮二も、この件に関して協力関係を保った。

二回の話し合いで決まったことは、まずは特定の資料群に関してのみ、民博資料と神奈川大学資料の対応関係を明らかにしようということだった。こうした調査をふまえて、作業量や問題点などを明らかにしてから、調査をより広範な資料群に広げて包括的なデータベース乗り入れを行っていくこととした。さしあたって調査を行う対象として、渋沢らが一九三四年に行った薩南十島調査に関わる標本資料、写真、映画を分析し、異なるタイプの資料のあいだで関連を探ることになった。実作業は、国際常民文化研究機構の共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」(代表：高城玲)のメンバーが進めていくことになった。

この作業の成果は、近藤が没してから七ヵ月後に刊行された「高城ほか二〇一四」。鹿児島から奄美大島までを旅する五日間に渋沢らが撮影した写真や映画に注目して、民博が継承している標本資料が写っていないかどうかを照合し、標本資料が収集された背景を明らかにしたのだ。アチック・ミュージアムが集めた膨大な資料群に較べると、これまでの作業はささやかなものにすぎない。しかし、これを踏み台として、さらに広範な調査を展開していく素地が整った。

近藤の死は、今後の計画にとっては予期せぬ事態だったが、すでに大きな一歩が踏みだされた。渋沢が残した

資料群を整理するにあたり、近藤が残した研究ネットワークを存分に活用しながら、次の段階を展望する時期にわれわれはさしかかっている。

【参考文献】

- 国立民族学博物館（監修）『洪沢敬三没後五〇年 屋根裏部屋の博物館 ARTIC MUSEUM』淡交社、二〇一三年
- 中生勝美「日本占領期の社会調査と人類学の再編——民族学から文化人類学へ」末廣昭編『岩波講座「帝国」日本の学知 六 地域研究としてのアジア』岩波書店、二〇〇六年
- 飯田卓一「昭和三〇年代の海外学術エクスペディション——「日本の人類学」の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』三二—二、二〇〇七年
- 木村裕樹「紀行文と旅映画——洪沢フィルム《飛鳥》を事例として」村尾ほか編、二〇一四年
- Grimshaw, Anna 2001. *The Ethnographer's Eye: Ways of Seeing in Modern Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Raddliffe-Brown, Alfred R. 1964. *The Andaman Islanders*. New York: Free Press.
- マリノフスキー「西太平洋の遠洋航海者」泉靖一（責任編集）『世界の名著五九 マリノフスキーレヴィーストロス』中央公論社、一九六七年
- 村尾静二・箭内匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』せりか書房、二〇一四年
- 高城玲ほか「国際常民文化研究叢書八 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」『資料編』神奈川大学 国際常民文化研究機構、二〇一四年

【参考URL】

- アチック ミュージアムにおける写真資料（国際常民文化研究機構）
<http://aticblog.jominkanagawa-u.ac.jp/>
- 標本資料目録データベース（国立民族学博物館、全資料の検索）
<http://htq.mnpku.ac.jp/databases/mo/mocaj.jsp>